

雨の葬儀

(User01 シュウのプレイヤーが読み上げてください)

雨が降っていた。

僕は両親と妹の眠る棺をただ見ていた。

去年はいつも笑っていた叔母さんは僕と視線が合ったことに気づくと目をそらしてしまう。

それは叔父さんも同じで、僕の知る親戚の面々は誰も僕と目を合わせてはくれない。

「うちは娘がいるから」

「部屋が片付いてないから」

ああ、僕はババ抜きの最後に残るカードなのだ。

捨てられず、誰にも引かれない。

またどこかで誰かが僕を引かない理由を口にする。僕への哀れみの言葉とともに。

聞いていられず、部屋を出た。ガラスのむこうの雨の音が僕を包み込む。

このまま雨とともにどこかへ流れて出ていくことができたら、皆の面倒事はきれいさっぱりなくなるのに。

皆は僕をどうするかの押し付け合いに忙しいのだろう。

式が終わるころになっても誰も話しかけてくることはなかった。

目を合わせる人ももういない。

どうして誰も、僕を見ないのだろう。

式が終わっても彼らの話はつかないようだった。

喧騒の隙間から、低くて落ち着いた声がした。

「うちに来るかい？」

その声だけは確かに僕に届いた。

振り向くと黒い傘の下で一組の夫婦が立っていた。

これが、僕が朔田家の家族になった始まりの記憶。